

---

# Breakfast

sakura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Breakfast

### 【コード】

N3523V

### 【作者名】

sakura

### 【あらすじ】

朝ご飯にまつわるアリッサとセリオの日常。

昨夜は帰りが遅かった。

というのも、仕事の依頼を受けに行っただけなのだが、なにぶん先方も仕事をしている身の上だ。

アリッサと比較すれば、超多忙な身の上と言えないこともない。そもそも、アリッサ自身が暇人すぎるのだ。

一般的にアメリカ合衆国の高学歴の人間たちほどワーカホリック気味な事は否めない。そのため、アリッサがその依頼人と落ちあうのもかなり時間が遅くなってからになる。

だいたい、と、アリッサは思う。いくら自分が外見通りに年齢を重ねていないからといって、夜の八時過ぎに仕事の話をしなければならぬというのは余りにも非常識だ。

いや、アリッサが年齢通りの肉体を持っていれば全くもって非常識などではない。しかし、多くの者たちは彼女の肉体年齢を考慮してかなり早い時間を、彼女と話をする時間として指定してくることが多かった。

もつとも、彼らが早い時間に彼女と落ちあう時間を指定するには、別の理由もあった。

それは、アメリカ合衆国ならではの児童年齢の子供に対する考え方のせいでもある。

夜遅くまで幼い容姿の彼女を連れ回せば、不要の疑いを向けられるのは大人達とも言えるのだった。

結局、そんなわけでアリッサがワシントンD・C.のアパートメントに帰宅したのは日付が変わった時間だった。

アリッサにとってひとりで帰宅することは何の問題もないことではあったが、面倒くさい事件を引き起こす危険を考慮して、依頼人自らアパートメントまで送り届けてくれた。

彼女の場合、なにがしかの事件に巻き込まれる可能性よりも、絡

んできたチンピラを過剰防衛で返り討ちにする危険性の方がよっぽど高い。

依頼主とのテーブルに着いたのが確か二十時半だったか。

その一時間後にはすっかり眠くなって船を漕いでいたわけだが、聞いていなかっただけではない。

内容の重要な点はきちんと聞いていた。しかし、依頼主は不快そうではあったのだが、そんなことはアリッサの知ったことではなかった。

ぼんやりと大きな冷蔵庫から牛乳のパックを取り出したアリッサは、昨日の会話の内容を思い出してから小首を傾げる。

「聞いているのか……？」

不快そうな声のアリッサの脳内で再生される。

椅子に腰掛けた彼女はコップに牛乳を注いでから、テーブルの端においてあるシリアルの箱を手にとった。

眠くて眠くて仕方がない。

「……聞いているわ」

不快げな声を頭の上でやりすごして少女はうとうとと眠りに落ちそうになる意識を引き戻した。

そもそも、自分をこんな時間に交渉の卓につかせるほうが悪いのだ、とアリッサは思った。

「別に、あんたたちにとってはビジネスだろうけど、わたしは断ったっていいのよ？ 居丈高になるのも大概にしてよね」

ぶつぶつと文句を言う彼女の声は強い眠気のためか覇気はない。

覇気があればそれなりに迫力もあるのだろうが、眠気を必死の思いで我慢している状態では迫力もへったくれもあつたものではない。

「わたしは、眠いの」

目をこすりながら彼女は言うと、手にしているスプーンを持ち直した。

「これは純然たる仕事の話だ、マジックボム」

「……うるさいわね」

まるで当たり前のように告げられて、彼女はゆらりと目をあげた。「だいたい、こんな時間に子供を連れだして、話は遠回りで核心をつかない。これくらい非常識なことってないでしょ？」

苛立たしげにつぶやいた彼女はかろうじて会話の重要な部分をなんとか意識で拾っているという有様だが、彼女の年齢を考えれば無理のない話だろう。

彼女が犯罪者であるからと、アリッサの都合などまるで無視をする男たちがなんと多いことだろう。

「君は、子供じゃないだろう」

彼女が生きてきた年数を考えれば、確かにアリッサは「子供」と言える年齢ではないということは明らかだ。

しかし、彼女が生きた年数とに関わらず、彼女の幼い体は同じ年齢の人間たちと同程度の活動をするための体力などあり得ない。

それを知る人間はほとんどいない。

小さな、幼い体の、傭兵として世界中を飛び回る彼女。

彼女が戦場で体力以上の仕事をこなすことができるのは、命がかかっているからである。

平和な場所で、そこまで自分の体力を正確にコントロールするわけではない。

「……あんたの目玉は、飾りなの？」

苛つくままにアリッサがそう告げれば、目の前にいるスーツを着た白人の男は眉を引き上げたようだ。

「わたしと、あんたがどんだけ身長差があつて体重差があつて、体力の差があるのかわからないの？」

アリッサの言うことは正しい。

小さな子供の姿の彼女。

かわいらしい、金髪の巻き毛の少女は水色の瞳を瞬かせている。

「あんたなにが気に入らないの？」

むっつりとした眼差しを向けて彼女は不機嫌に肘をつくとその手のひらで頬を支える。

眠すぎて彼女の瞳は半分になっていた。  
そう言われて見ればそうだ。

スーツを着た男は我に返ったようだ。  
目の前にいるのは成熟した人間ではない。頭の中は成熟している  
かもしれない。

しかし、彼女の肉体はそうではない。

「……別に、気に入らないわけじゃ」

「まあ、いいわ。一応聞いてるから、勝手に話してくれない？ わ  
たし、眠くて仕方がないのよ」

ため息混じりに彼女は言うのと、男の話の先を促した。

気に入らないのか。

彼女はそう言った。

「すまん……」

「いいわよ」

仕事の話。

アリッサはそう割り切っている。

ひとたび、彼女が機嫌を損ねればどうなるか、彼女に仕事の依頼  
をする人間たちが知らないわけではない。

そうして話が終わったとき、時刻は日付が変わっていた。

どんなに眠くても彼女はきちんと話の要点は押さえている。

話を聞いていたのかと、尋ねられれば彼女は「もちろん」と言う。

アリッサは、裏社会のトップクラス。

どんな仕事も依頼を受け、報酬を受け取る以上完遂する。

古い電話が鳴った。

アリッサが電話の受話器を取ると、相手は勝手にスペイン語でま  
くし立てる。

そのスペイン語だけで相手はわかった。

「……うっさいわね、朝から」

機嫌悪そうな彼女の声に、電話の向こうで男は笑った。

「うるさいと言いながらちゃんと起きてたんじゃないか」

「考え事しようと思ったから起きただけよ」

彼女は大概の場合、暇をしていることが多いが、別にだからといって一日中ぐうたらしているわけではない。

「これから食事かい？」

男の穏やかな声にアリッサは長い息をついた。

「だったらなに」

「……キツシュを焼いたから、食べにこないかい？ 散歩がてら」

男の申し出に彼女は皿に注ぎかけたシリアルに目をやる。まだ牛乳はかけていない。

アリッサは一瞬だけ考えてから「わかった」とつぶやく。

彼女は身長が低い。キッチンに立つのもやっとだ。そのため、アリッサは料理を得意とはしていなかった。

電話の相手はそのことを知っている。

まだ時間は八時過ぎ。

男が電話してきただろうカフェまでは歩いてほんの三十分程の距離だった。

「セリオ」

「……なんですか？」

「おなかすいた」

結局、昨晩は眠すぎて夕食もろくに食べられなかった。

だいたいあんな時間を指定する男が悪いのだ。

ぼんやりと考えながら彼女は金色の巻き毛をかき回してため息をついた。

「……今日のは自信があるんですよ」

明るい太陽のような笑い声をあげてから、セリオと呼ばれた男はそう言った。

カフェの店長であるセリオ。

彼の作るキツシュが彼女のお気に入りだった。

大きなあくびをしたアリッサは、椅子の背中にかけてあるポレロをとると袖に腕を通してカバンを手に取る。

その姿だけを見れば、まさか犯罪者には見えなかった。

のんびりと歩く彼女は初夏の空気の下、コサージュのついたサンダルをはいた足でカフェに向かう。

三十分と少しの道を歩いて彼女は目的のカフェに着いた。

がらりと、ドアのベルが鳴る。

「まだ開店前なのに、いいの？」

「聞きましたよ、レオンが仕事でしばらくいないって」

セリオの言葉に、アリッサは眉をひそめた。

レオン、というのはアリッサが同居している白人青年でレオナルドという。その愛称だ。

「あなた、レオンがいないと食事はいつもシリアルとかオートミールばかりだから」

言いながら男が笑う。

「なによ、わたしだってひとりのときはちゃんと食事してるわよ」

そうは言ったところで、アリッサの言う「ちゃんとした食事」というのは冷凍のラザニアやピザを買ってすませるというたぐいのものだ。それを男は知っているから、やれやれと肩をすくめるだけだ。放っておくとジャンクフードですませるといのは、とてもではないが体に気を遣っているようには見えない。

「レオンがいないときは、気にしないでうちに来てくれてかまわないですよ？」

セリオはアリッサにそう言うってから彼女の目の前にカットしたキッシュとサラダ、そしてホットミルクを並べてやる。

カウンターに座ってぶらぶらと足を揺らす彼女はもう一度大あくびしてから座り直した。

「ところで昨日は随分遅かったようですが、なにかあったんですか？」

中年のヒスパニックの男に尋ねられて、彼女はキッシュをフォークでつつきながら「なんでこんなに暑いのにホットミルクなのよ」と文句を言う。

「何を言ってるんですか、冷たいものは体によくはないのはわかって  
いるんでしょう?」

まるで小言のような彼の言葉を流し聞きながらアリッサはキッシ  
ュを口に放り込んだ。

「……………どうです?」

男はカウンターから身を乗り出して問いかけた。

ぴかぴかに磨かれた皿とカップ。セリオがアリッサのために準備  
をしているものだ。

「……………」

「どうです、と尋ねられてもアリッサは答えない。

もっともまずければまずいとはつきり言う彼女の事だ。答えが  
ないということは、その答えは明らかである。

「唇についてますよ」

「……………え?」

首を傾げた彼女は目線を上げる。

セリオは大きな手を伸ばして彼女の唇に長い指先で触れる。

唇の端についたキッシュウのかけらをとってやるとアリッサは驚い  
た様子で水色の瞳を大きく見開いた。

小さな幼い彼女。

「仕事もいいですけど、できれば俺を通してくださいよ。そうすれ  
ば俺があなたの仕事をコントロールできますから」

「……………突然だったのよ」

「そうでしょうねえ」

本来、アリッサに仕事の依頼は、仲介屋でもある男、セリオがい  
ったん聞くことになっている。

なぜならば彼女は体力が極端に低い。

それはアリッサの小さな体のせいだった。

「随分遅くまで話をしていたようですが、俺は、あなたが心配です」  
男の言葉に少女は肩をすくめる。

カウンターの奥で果物を皿に盛りつけているセリオはアリッサに

背中を向けていた。

「大した話じゃなかったから、心配いらないわ」

しばらくして、セリオの出した食事を完食した少女の目の前に果物の盛り合わせを置く。

デザートのもりだったが、アリッサは思い切り顔をしかめた。

「多すぎるっつば」

「ちゃんと食べてくださいよ、あなたの体はちゃんとコンディションを整えておかないと突然のことに対応できないんですから」

「……っ」

目の前に置かれた果物の盛り合わせの皿とにらめっこしてしまったアリッサの様子が、なにやらかわいらしくて、セリオは苦笑を誘われる。

ため息をつきながら果物をつついているアリッサが、ぶちぶちと文句を垂れていると店員らしい女たちが賑やかに店内へと入ってくる。

「おはようございます、マスター」

そんな彼女らを尻目に果物と格闘しているアリッサは、結構な時間をかけてから攻略した頃には店内は客達の声でざわめきに満ちていた。

食べ終わってから、カウンターに皿をそのまま放置すると窓際の席に移動した。

邪魔になるとか、そういった理由からではないのは店内のスタッフたちの全員が理解している。

何度もあくびを繰り返す彼女は窓に寄りかかると、そのまま目を閉じる。

ほどなくして寝息をたてて眠り込んでしまったアリッサに、店員たちは顔を見合わせると声もなく笑う。

ざわめく店内で少女が眠っている。

ウェイトレスがブランケットをアリッサにかけてやった。

料理が不得手なアリッサ。

彼女の私生活を支えてやるのはセリオの仕事ではない。しかし、アリッサのどこか危うい様子を見てると手を差し伸べずにはいられない。

「店長のキッシュおいしいですけど、あの子が来るときにしか作らないですよね」

そう言われてセリオは声もなく笑った。

アリッサの好物だから店のメニューにはなくても作るだけのことだ。もちろん、彼女が毎朝来るようなときはそればかりではない。

バランスを考えて料理をしてやるのも彼の役目だと、勝手に思っている。

眠っている幼い少女を見つめてセリオは口元だけでかすかに笑った。

「彼女の好物だからね」

口の中で、小さくスペイン語でつぶやくと、そうして彼はカウンターの中で客達のオーダーに答えるためコーヒーカーップを手に取るのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3523v/>

---

Breakfast

2011年8月1日03時18分発行